

令和6年度都道府県医師会 勤務医担当理事連絡協議会



理事（現常任理事） 涌波 淳子

令和6年度都道府県医師会勤務医担当理事連絡協議会

次 第

日 時：令和6年5月17日（金）
午後2時00分～4時00分
場 所：日医会館小講堂
（WEB会議併用）

総合司会 日本医師会 常任理事 今村 英仁

1. 開 会

2. 会長挨拶 日本医師会 会長 松本 吉郎

3. 全国医師会勤務医部会連絡協議会について

- (1) 令和5年度担当医師会報告（青森県医師会）
- (2) 令和6年度担当医師会挨拶（福岡県医師会）

4. 協 議

- (1) 大規模災害と勤務医
日本医師会 常任理事 細川 秀一
- (2) 若手医師の期待に応える医師会の姿
日本医師会 常任理事 今村 英仁

5. 閉 会

令和6年5月17日、令和6年度都道府県医師会勤務医担当理事連絡協議会が日本医師会館からweb配信にて開催された。まず、日本医師会松本吉郎会長より能登半島地震被災地支援に対する感謝の言葉があり、その後、JMAT参加医師の7割が勤務医であり、JMAT活動には勤務医の協力が欠かせない事、未来医師会ビジョン委員会の答申からは若手医師の考え方を傾聴し、会務に反映していくためにも勤務医部会の皆さんの意見が大切であることが語られた。

次に、全国医師会勤務医部会連絡協議会について令和5年度担当の青森県医師会から令和5年10月に開催された上記連絡協議会について

の報告がなされた。これについては、沖縄県医師会会報1月号（沖縄医報 Vol.60 No.1 2024）に記載済みなので割愛。令和6年度担当の福岡県医師会からは、来る10月26日に「勤務医の声を医師会へ、そして国へ、～医師会の組織力が医療を守る～」をメインテーマに開催することが広報された。沖縄県からはぜひ中間管理職レベルの勤務医を送っていききたいと思う。

協議事項1は、「大規模災害と勤務医」と題して日本医師会常任理事の細川秀一先生が能登半島地震における、JMATの活動を中心に日本医師会としての対応についてご説明された。1月1日に発災し、1月4日に開催された「令和6年能登半島地震医療関係団体等緊急会議」の中で、日本医師会としては長期、大規模なJMAT派遣を行う方針を表明し、1月5日には全国の都道府県医師会に対して、JMATの編成、派遣要請を行っている。1日あたりのチーム派遣延べ数の累計は、およそ3,500チーム、一日あたりのチーム参加者延べ数の累計はおおよそ12,000人となり、多くの勤務医及び派遣病院の協力を得て、5月末まで派遣の予定である。その中でインフラの復旧が整っていない地域での活動に対応できる「重装JMAT」はDMAT隊員をはじめとした多くの勤務医が活躍してくれた。今後想定される南海トラフ巨大地震における紀伊半島や四国地方では、能登半島と同様、過疎化が進み、陸路からのアクセスも困難な状況が予想されるし、また、日本海溝地震では、医療圏そのものが広く、一つの医療圏が一つの県に相当する場合もあること、また、札幌医療圏を除いて、人口密度は低く、医療資源も限られるため、災害時の支援も困難と指摘されている。

質疑応答の中では、通常の JMAT と重装 JMAT の違いが質問され、巡回診療を中心とした JMAT に比較して、重装 JMAT は、ライフラインが壊滅している中でのハードな環境での活動であり、事前に登録し、訓練を行っておくことが必要であることや病院によっては DMAT として登録している隊を JMAT として派遣することの検討も質疑された。また、勤務医が JMAT として活動するためには所属病院の病院長の理解と許可が必要となることに関して、医師会としても AMAT (All Japan Hospital Medical Assistance Team) を派遣している全日本病院協会とも話し合っていくこと、研修医の協力もえられるよう調整していきたいと述べられた。医療ニーズや介護施設支援ニーズ、後半では耳鼻科や眼科など専門家のニーズ等種々のニーズに応えられる調整力を発揮するために、日本医師会の救急災害委員会では、発災時に統括機能をもったチームを派遣して本部機能が構築できる「動ける救急災害委員会」になりたいと話合っている事が報告された。

協議事項 2 は、「若手医師の期待に応える医師会の姿」と題して日本医師会常任理事の今村英仁先生が、未来医師会ビジョン委員会の歴史とそれによって「日本医師会かかりつけ医講座制度」や全国郡市区医師会長協議会等が創設されたことが報告された。特に、今期の未来医師会ビジョン委員会では、若手医師や勤務医とともに 若手医師の特徴である「タイムパフォーマンス重視」、「理不尽は嫌」、「社会の役に立ちたいが方法が分からない」、「専門医取得まででキャリアイメージが止まっている」等についての意見交換をし、医師会入会に関する意見や若手医師の期待に応える活動について答申をまと

めている。全国各地で活躍する若手医師の取組を取り上げ、その想いを共有し、国民の信頼に応えていく医療の“未来ビジョン”を探るために「未来ビジョン若手医師の挑戦」というシンポジウムを 5 月 11 日に開催すると述べられた(このシンポジウムは、下記特設サイトで発信中)。質疑応答としては、組織力強化は、先輩医師から後輩医師への教育が大切で、専門医を目指しつつかかりつけ医の視野を持つこと等のメッセージを日本医師会からも発信してほしいという意見や現在会費を無料化している研修医の入会率をあげるためには大学医師会との協力が必要という意見、また、その 5 年間で医師会の在り方を見てもらう工夫、医師会活動に参加する機会、特に郡市区医師会では二次医療圏の中で若い医師が活躍できる場の提供などが大切であるという意見交換がなされた。

最後に猪口雄二副会長の閉会の言葉で閉められた。

日本医師会会員の 50% 以上を勤務医が占めるようになり、今後、ますます勤務医部会としての活動は期待されている。今回の協議会でもあったように、「顔の見える関係」が一番のモチベーションになる。日ごろの医師会活動や JMAT 活動などを通して、勤務医が医師として地域の中で活躍できる場を郡市区医師会や県医師会が提供し、医師会が勤務医にとってもっと身近な存在になることが大切だと感じた。

※報告書の詳細につきましてはホームページをご参照下さい。

<https://www.okinawa.med.or.jp/medical/kaihou/houkoku/202303-2/>



■未来ビジョン “若手医師の挑戦”

<https://www.med.or.jp/people/vision/>

